

# 幼児の言語研究 (二)

## 幼稚園児の話しコトバの実態



西ノ内多恵  
伊東照子  
村田和子

### ◇はじめに

前回では、目的・方法・基礎資料作成上の留意点および基礎資料の一部紹介をおこないましたが、今回は、それらの基礎資料をもとに、今まで名詞について、年齢別に分析・考察してきたものを参考とし、三歳～五歳までの発達段階からみた名詞論を試みようとします。

### ◇方法

#### (1) 基礎資料分析の方法

まず、基礎資料を品詞別に分類するに当たり、品詞を、名詞・動詞・形容詞・形容動詞・副詞・連体詞・助動詞・格助詞・接統助

詞・感動詞とし、それぞれにアルファベット順の記号をつけることにした。すなわち、名詞は a、動詞は b、といった具合である。発話の記録の側に品詞別に棒線を引き、記号で分類していった。<sup>(注1)</sup>品詞分類が完了したら、それらの中から名詞のみを選び出して、用意した名詞のノートに被験児五名分を、順次転記していった。

#### (2) 名詞の分類の方法

①ここでいう名詞は、普通名詞・代名詞・数詞、擬音擬態擬声語、固有名詞、外来語を含む。一般的な文法論からすると、外来語とか擬態擬声擬音は名詞の中に含まれていないが子どものコトバという特殊性のために、現代の日本語文法に当てはめてみると、はみ出さざるを得ないので、特に加えた。

まず品詞別に、使用頻度数を出した場合、名詞を一体どれくら

い使用しているか比較検討してみた。

⑧次に、普通名詞についての分析を試みる上で、Allen Walpoleの分類項目を参考として、十一項目（作表Ⅱを参照されたい）を設け（その際一ページに一人の被験児の十一項目を納めるように枠づくりをした）、普通名詞をそれぞれの項目に分類していった。

こうした作業は、できるだけ三人が同時におこない、共通した項目に分類できるように考慮しながらすすめた。

⑨擬音擬態擬声語は、それぞれ擬音↓ボタン、擬態↓バチャバチャ、擬声↓コケッコの三つに分けて分類し、数詞・外来語・固有名詞（友だちの名前などの人名は除く）代名詞については、方向・場所・事物に分け、さらに他称と不定称を設け、他称を近称・中称・遠称に分けて、該当するものを使用回数を記入しながら分類した。人代名詞は、自称・対称・不定称に分けた。

その他の敬語の「お」のつくことばについても選出しておいた。

⑩分析の集計について  
 ①普通名詞 十一項目に分類した普通名詞の数を五名について項目ごとに計上し、その平均を出した。ついで、平均によって順位を決定・項目を順位に並べかえ、使用回数の多い項目また、録音回数による変化、年齢的な内容の移行など具体的に把握できるように作表してみた。

②その他の名詞 擬音擬態擬声語・代名詞・数詞・外来語・固

表Ⅰ 30分間における年齢別の名詞の平均値

年齢	名詞の種類	名詞の種類					
		普通名詞	代名詞	擬音擬態 擬声	数詞	外来語	固有名詞
3	歳	120.7	72.4	53.3	23.7	16.5	4.2
4	歳	104.7	78.2	54.5	23.7	14.2	2.0
5	歳	114.3	93.4	48.1	18.9	15.5	1.1

有名詞はすべて、使用回数を出してそれらの傾向、年齢別の比較をおこなった。

◇結果と考察および要約

分析の最初の段階で品詞分類を試みたが、その結果は、三歳児・四歳児・五歳児共に名詞の優勢化は、共通しており、それは従来の諸研究とも一致をみるものである。

△普通名詞√名詞中で一番多く使用されており、これも三、四、五歳児共通である。

（表Ⅰ）参照

次に年齢別に十一項目の分析の作表をみると表Ⅱのごとくになった。

分析した結果を、一位から三位までを取り上げ、さらに年齢別に考察すると、録音一回目では三歳児では「人間関係」「身体に関するもの」「飲食物に関するもの」二回目では「人間関係」「身体に関するもの」「雑（抽象名詞）」三回目は「人間関係」「雑」「遊具遊び場」の順となった。

「人間関係」が三回を通じてもっとも多いというのは、この年齢における社会性の広がりの意味しており、園における集団生活の結果とあいまっているからであろう。三歳児段階における重要

表 II

4 歳 児				3 歳 児			
録音回数	普通名詞の分類項目	平均	順位	録音回数	普通名詞の分類項目	平均	順位
一 回	人間関係またはそれに付随するもの	36.3	1	一 回	人間関係またはそれに付随するもの	50.0	1
	色または形に関するもの	18.7	2		身体またはそれに付随するもの	30.4	2
	自然現象に関するもの	15.7	3		飲食物に関するもの	11.8	3
	場所方向に関するもの	13.0	4		雑（抽象名詞）	10.4	4
	雑（抽象名詞）	10.3	5		遊具遊び場またはそれに付随するもの	9.4	5
	遊具遊び場またはそれに付随するもの	6.3	6		自然現象に関するもの	9.2	6
	住居に関するもの	5.7	7		場所方向に関するもの	9.0	7
	飲食物に関するもの	2.0	8		日用品に関するもの	7.4	8
	身体またはそれに付随するもの	1.0	9		色または形に関するもの	3.6	9
	日用品に関するもの	1.0	9		住居に関するもの	1.6	10
	衣服に関するもの	0	10	衣服に関するもの	1.6	10	
二 回	雑（抽象名詞）	35.8	1	一 回	人間関係またはそれに付随するもの	33.6	1
	遊具遊び場またはそれに付随するもの	14.2	2		身体またはそれに付随するもの	17.0	2
	場所方向に関するもの	9.8	3		雑（抽象名詞）	14.6	3
	自然現象に関するもの	8.6	4		遊具遊び場またはそれに付随するもの	12.2	4
	人間関係またはそれに付随するもの	8.0	5		場所方向に関するもの	12.2	4
	身体またはそれに付随するもの	3.8	6		飲食物に関するもの	7.4	5
	住居に関するもの	3.2	7		自然現象に関するもの	6.6	6
	色または形に関するもの	2.6	8		色または形に関するもの	6.0	7
	飲食物に関するもの	1.8	9		日用品に関するもの	4.8	8
	日用品に関するもの	0.6	10		住居に関するもの	2.6	9
	衣服に関するもの	0	11	衣服に関するもの	2.0	10	
三 回	雑（抽象名詞）	25.6	1	三 回	人間関係またはそれに付随するもの	23.4	1
	人間関係またはそれに付随するもの	24.6	2		雑（抽象名詞）	17.4	2
	自然現象に関するもの	19.2	3		遊具遊び場またはそれに付随するもの	15.2	3
	場所方向に関するもの	12.8	4		身体またはそれに付随するもの	13.6	4
	飲食物に関するもの	11.0	5		自然現象に関するもの	11.0	5
	身体またはそれに付随するもの	6.0	6		場所方向に関するもの	4.0	6
	遊具遊び場またはそれに付随するもの	5.0	7		色または形に関するもの	3.8	7
	住居に関するもの	4.6	8		住居に関するもの	3.6	8
	色または形に関するもの	4.4	9		日用品に関するもの	3.6	8
	日用品に関するもの	3.0	10		衣服に関するもの	1.8	9
	衣服に関するもの	0.8	11		飲食物に関するもの	1.2	10

5 歳 児		平均	順位
録音回数	普通名詞の分類項目		
一 回	雑(抽象名詞)	27.4	1
	人間関係またはそれに付随するもの	19.4	2
	遊具遊び場またはそれに付随するもの	15.4	3
	場所方向に関するもの	15.0	4
	身体またはそれに付随するもの	12.4	5
	自然現象に関するもの	11.2	6
	住居に関するもの	11.2	6
	色または形に関するもの	9.6	7
	日用品に関するもの	8.6	8
	飲食物に関するもの	3.2	9
衣服に関するもの	1.0	10	
二 回	遊具遊び場またはそれに付随するもの	31.8	1
	雑(抽象名詞)	16.4	2
	人間関係またはそれに付随するもの	15.4	3
	場所方向に関するもの	7.4	4
	自然現象に関するもの	5.4	5
	日用品に関するもの	5.4	5
	住居に関するもの	5.2	6
	飲食物に関するもの	3.8	7
	身体またはそれに付随するもの	3.4	8
	色または形に関するもの	3.2	9
衣服に関するもの	0	10	
三 回	遊具遊び場またはそれに付随するもの	39.6	1
	人間関係またはそれに付随するもの	16.6	2
	自然現象に関するもの	14.4	3
	場所方向に関するもの	11.8	4
	雑(抽象名詞)	7.4	5
	住居に関するもの	5.4	6
	身体またはそれに付随するもの	4.4	7
	飲食物に関するもの	3.8	8
	日用品に関するもの	2.2	9
	衣服に関するもの	2.0	10
	色または形に関するもの	1.0	11

な特徴ともいえるようである。

「身体に関するもの」が次に多いが、これは、幼児の描画の発達と関連させて考えてみると、最初は錯画期から次第にかたちのあるものへと発達し、命名期を経て、いわゆる「頭足人」が登場する。「頭足人」とは頭部あるいは胴体が丸がきで描かれ、そこからいきなり手や足が描かれる。「頭足人」の段階に達するには、個人差があるが、大体三歳前後にあたり幼稚園の三歳児組において一年間を通じてこの段階を卒業できない子どもも見られる。次の段階で、目・鼻・口が描かれるようになり、首、肩・耳などは比較のおそく出現する。この人型はチューリップ・太陽・木・家などと平行して描かれるが、このような描画の発達段階に見られ

るところの、身体に関する子どもの認識が、遊びの中においては、身体に関するコトバの形をとって表現されるのではないだろうか。「雑」の使用回数が多くなり、「遊具遊び場」が次にあがってきている。抽象名詞、たとえば、輸血・腕前・用意・研究・失敗・待機・種あかし、嘘・わがままなどの順位が、録音を重ねるに従って高くなっているのは、語彙の採集期間が、六ヶ月にわたっておこなわれたこと、その間の思考の発達、コトバと認識の結びつきによる語彙の増加などによるものと思われる。

四歳児においては、「人間関係」が一回目の録音では多く、次に「色または形に関するもの」、「自然現象」、二回目では、「雑」に「遊具遊び場」、「場所方向」とつづき、三回目は、「雑」「人間

関係」「自然現象」となった。「人間関係」が多いのと、録音回数を重ねるに従って、「雑」の項目が非常に順位が高くなっているのが特徴としてあげられる。「雑」の項目（たとえば、秘密・発明・防衛・圧力・成功・臨終など）が三歳児に比較して飛躍的に高くなっていることは、四歳児の抽象思考が、急激に発達することを示唆しており、興味深いものがある。

「人間関係」の項目が多いことは、三歳児段階より社会的な人間とのかかわりが生活の中で大きな位置をしめていることを物語っている。三歳・四歳児の集団生活への参加が発達の上からも大切であり、仲間づくりが、コトバを通して、より高度な思考を育てているといえるのではなからうか。五歳児における分析の結果は、前二者と重複している部分と、全く異なった項目が上位をしめるといった様相がみられた。すなわち、一回の録音では「雑」「人間関係」「遊具遊び場」の項目の順序であり、二回目には「遊具遊び場」「雑」「人間関係」、三回目は、「遊具遊び場」「人間関係」「自然現象」の順位となり、「遊具遊び場」が回数を重ねるに従って上位をしめ、つづいて「雑」の項目が高順位にある。「遊具遊び場」が上位にあることは、五歳児においては、目的思考をより助長させるための遊具に関する名詞が多く使用されるからではないかと思われる。すなわち、五歳児の目的思考、つまり遊具を媒体として行動と思考とをコトバで結びつける作業が、遊びの中で盛んにおこなわれているのである。

これらの事柄をふまえて、特に五歳児においては、目的思考がより高まりつつ達成され得る遊具を選定して与えることと同時に、「人間関係」の項目が、三、四歳児と同じく上位にあるのは、前二者よりも、友だち関係が、複雑多様になるのであるから、それらを満足させるる生活づくりを設定することがのぞましいのではないだろうか。なお、被験者の数をふやして、今後も分析考察していく必要がある。 「雑」の項目も高順位にあるが、三歳児から次第に抽象思考へと移行していくようですが、作表化することにより明確にとらえられる。表Ⅲによれば、「人間関係」の項目は、三、四、五歳児を通じて、上位をしめており、「雑」の項目は、三歳児から四歳児へ次第に順位が高くなっているのがみられる。「遊具遊び場」の項目も、三歳児の終わりから、四歳

表Ⅲ 使用傾向の内容 3歳 4歳 5歳

順位	3歳	4歳	5歳
1	3 遊具遊び場 2 遊具遊び場 1 人間関係	3 雑(抽象名詞) 2 雑(抽象名詞) 1 人間関係	3 遊具遊び場 2 遊具遊び場 1 雑(抽象名詞)
2	3 人間関係 2 人間関係 1 身体	3 人間関係 2 遊具遊び場 1 色または形	3 人間関係 2 雑(抽象名詞) 1 人間関係
3	3 遊具遊び場 2 雑(抽象名詞) 1 飲食物	3 自然現象 2 場所方向 1 自然現象	3 自然現象 2 人間関係 1 遊具遊び場

児では、一番使用の多い名詞となっている。

これらを総合すると、集団生活の重要さと具体的思考から、抽象思考への発達について知的興味の実態をより徹視的にとらえていく必要があると同時に、保育者の的確な言語指導の重要性が問われてくるのであろうし、遊具の採用にも、年齢別による研究と開発をすすめていかなければならないであろう。

△代名詞Ⅴ三歳児では、「ぼく、あたし」の人代名詞が圧倒的に多く、三十分間に、三十九回も使用している。次に事物の近称「これ」「ここ」が、五名の被験者に共通にみられる特徴となっている。四歳児では、人代名詞より事物の近称「これ」が他を圧倒して多く、三十分間に三十八回使用、次いで、近称の方向を示す「こっち」「ここ」の順位になっている。

五歳児は、事物の近称「これ」が多く「こっち」「ここ」がこれに次いでいるのは、四歳児と同じ傾向を示している。

三歳児の自称「ぼく」が多いのは、自我意識の確立によるものと、集団生活において、特に自己主張する必要（他我に対する）から発せられるということも考えられる。「これ」「ここ」の多いのは、事柄の名称をいわなくても、単に「これ」「こ」「こ」と指せばよいのであり、このような便利なコトバの使用法と一度習得したならば、その容易さ、便利さは、非常な速さで子ども側の定着するものと思われる。四、五歳児において、自称「ぼく」の使用数が減少しているのは、自我の確立の時期から、園の集団

生活に入り、かなり他人を認められるようになってきたことを示しているのではなからうか。「これ」「こっち」「ここ」が多いのは、三歳児で分析した通りのことが、ここでもいえると思う。

この場合は、二人の子どもの遊びの場面での発話であるため、「これ」「あれ」「こっち」などのコトバでも、比較的簡単に相手に通じて会話が成立するが、集団生活の場合、年長児になるに従って、事物の名称が、相手に明確に伝達されるようにならなければ、生活自体、成り立ちにくい事態を招く。具体的な場面で、事物の名称を知らせるとともに、空間の把握「上下」「左右」「前後」等もおりに触れ指導していく必要があるのではなからうか。

△擬音擬態擬声語Ⅴ 三、四、五歳児を通じて、代名詞の次に使用回数が多く、特に男児が頻繁に連発している傾向がみられ、女児においては比較的少ない。これは、男児と女児の遊びの種類の相違によるもので、動的な動きの激しい遊びをしているとき、そのものに成りきって、擬音擬声を発する 경우가多くみられた。

△数詞Ⅴ 三歳児は性別による使用数の違いがあげられる。擬音擬態擬声語と同じく、男児に多く女児は少ない結果が出た。男児の場合に数唱のうたうような反復と、基数1から38までの数唱がみられた。しかし、正確なものではなく、ところどころ脱落させた唱え方をしており、数への興味はあるが、まだ低次な段階での知的把握しかできていないようだ。

四歳児では、三歳児より、一段と進歩がみられ、事物に適した

数唱が、広範圏に多種類にわたって使用されており、たとえば、一つ・一枚・一個・一回・一人・一段・一発・一分・一時間・等事物と対応させて、計数作業が可能になってくる。これらは、四歳児における概念の発達・時間などにみられる空間概念の発達によるものと思われる。

五歳児においては、数唱は10近くまで、脱落なくでき、一対一対応による計数作業はもちろんであるが、合成と分解についても、比較的正確にとらえて、遊びの中で、楽しんで使用していた。

今回の場合、四歳児ほど、数称の多様さはみられなかった。

△外来語 V 三、四、五歳児を通じて、性別による違いがみられ、男児は、遊具とか乗り物に関するもの、また、映像文化の影響と思われるものが多く、女児においては、服装・日用品に関するものが多くみられた。

△固有名詞 V これも、三、四、五歳児とも、使用回数は、名詞の中では少なく、テレビの登場人物とか地名があげられるのが特徴である。

△敬語「お」のつく名詞 V 三歳児では、三十分間の使用頻度が最高で三十八回、その他三十五回、二十六回、二十三回、二十回と非常に高い結果が出ている。四歳児では、割合少なく、三十分間に、平均五、六回という頻度で、三歳の追跡研究として五歳児をみると、多いところでは三十分間に五十七回も使用している。

全体を通じて、やはり女児の使用が多く、男児は少ない。

当園において、保育者が意識して不要な「お」を使用しないように留意しているのが、男児においては、三歳児より非常に減少の途をたどっているが、女児における追跡の結果は、それほど減少していない。四歳児においては、園側の姿勢が反映して好結果をみせているが、反面、一朝一夕に変えられるものでないことを示しているようである。つまり、友だち関係にもよろうが、社会一般の通念として「女は女らしく」が家庭の中で要求されるためであろう。このような結果が出てくると当然家庭生活の中での、遊びコトバの実態も調査してみる必要があると思う。

家庭・園と協力して不必要な「お」ことばの追放を行わないと、園のみでの教育の効果はあまり期待できないのではないかと、大まかな名詞論をこころみだが、これによって、三歳〜四歳〜五歳の発達の過程の側面が、うかがえた。これらは、今後の保育への一手がかりとなりうると思っている。

前にも述べたように、被験児の数が現在のところ、五名に限られているので、より明確な結果を求めて、その数を増加し、追跡研究していきたい。できたら、同じ研究を土地を変えてすすめていけたら、最終目的へより近づけるのではなからうか。

注1 e i b h e i b h i h

ここからいったらこっちにつながつたんだらう？

e 名詞、b 動詞、h 助動詞、i 格助詞

(白梅学園短期大学附属白梅幼稚園 村田和子記)